様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ３０ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2017～2018
課題番号：１７Ｈ０７２５３

研究課題名（和文）論述型の大学入試に向けた高校での指導・評価法の研究：フランスでの取り組みを通して

研究課題名（英文）Evaluation of essay-style university entrance examinations: A case study from France

研究代表者
細尾　萌子（hosoo, moeko）

立命館大学・文学部・准教授

研究者番号：７０６３３８０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：フランスの大学入学資格試験のバカロレア試験では、論述試験が中心である。本研究は、バカロレア試験に向けたフランスの高校での指導・評価法について、生徒のレベルや教科による大きな違いはないことを明らかにした。多くの教師が、論述課題の添削や協同学習など、生徒のコンピテンシーを高める工夫をしている。コンピテンシーとは、知識を活用する問題解決力である。この知見をもとに、日本の高校での指導・評価法の実践的指針を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本では、大学入学共通テストの導入など、高大接続改革が進んでいる。そこでは、知識だけでなく、思考力・判断力・表現力も、高校から大学にかけて一貫して育むことがめざされている。フランスのバカロレア試験は古くから論述試験を中心としており、思考力などを問う試験である。高校はこの試験に向けて指導・評価をしている。したがって、フランスの高校での指導・評価法は、思考力などを育成する日本の高校改革の模範になりえる。

研究成果の概要（英文）：The baccalaureate examination required for entrance into universities in France focuses on essay exams. This study has revealed that there are no significant differences in the way instructions and evaluations are provided in French high schools for the preparation of the baccalaureate exam regardless of the students' performance level or the subject matter. Many teachers are seeking to improve students' competencies by correcting their assigned essays or conducting collaborative lessons. Competencies are abilities to solve problems by utilizing knowledge. Based on this insight, this study has suggested practical guidelines for providing instructions and evaluations in high schools in Japan.

研究分野：教育方法学

キーワード：大学入試　フランス　バカロレア試験　思考力・判断力・表現力　コンピテンシー　高大接続　高校教育　指導・評価法

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本の大学入試は知識の習得状況の評価を重視していたため、高校教育は、知識の伝達に偏りがちであった。そこで、高校教育と大学教育を、知識だけでなく思考力・判断力・表現力も育てる学びに変革すべく、大学入試改革が進んでいる。大学入学共通テストに記述式問題が導入予定で、各大学の入試には多面的・総合的な評価法を導入することが推奨されている。

このように大学入試が、知識ベースから論述ベースに変わるのであれば、高校での指導・評価法も、従来の知識ベース一辺倒のものから改善する必要がある。2022 年度から高校で年次進行によって実施される新学習指導要領では、知識の伝達を中心とするのではなく、知識を活用して実践する資質・能力（コンピテンシーなど）を育成・評価する教育課程へと転換することが謳われている。そのため、学習指導要領自体に、「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング。以下、AL と表記）を実現する指導法や、資質・能力を評価する方法が記載されている。学習指導要領は、すべての学校が守らなくてはいけない教育課程の国家基準である。すなわち、AL や資質・能力を捉えられる評価法は、すべての学校・教科で導入することが推奨されているといえる。

ところが、AL は、家庭の文化・経済面での差や子どもの学力レベルの差を強く反映するため、生徒間の格差を増幅させる危険性があるという指摘もある。この指摘から一歩ふみこむと、次の問いが生じる。それは、論述型の大学入試に向けた高校での指導・評価法を開発する際、すべての学校・教科において一律の方法を適用することは、すべての生徒の資質・能力を育む上で、果たして有効なのか、という問いである。

ここで、論述型の大学入試を 1808 年から続けてきたフランスに目を向けてみたい。高校最終学年末に実施される大学入学資格試験のバカロレア試験では、選択肢問題はほぼなく、論述問題がほとんどである。バカロレア試験に合格すると、基本的にどの大学にも入学できる。

さらに興味深いことに、フランスでは、知識を活用して具体的な状況の課題を解決する能力である「コンピテンシー」を育成する教育改革が、1990 年代からすでに進んでいる。中等教育では、教科の知識の体系を伝達する教養教育の伝統が根強かった。だが、義務教育段階で生徒全員が獲得すべき基礎学力として、「知識とコンピテンシーの共通基礎」が 2005 年の教育基本法で定められて以来、コンピテンシー教育政策は中等教育段階でも導入されている。

それゆえ、論述型の大学入試とコンピテンシー・ベースの教育を先取りするフランスの実践から、論述型の入試に向けた日本の高校での指導・評価法への示唆が得られると考えた。

研究代表者はこれまで、科研費の特別研究員奨励費（2010-2011 年度、研究代表者）や研究活動スタート支援（2012-2013 年度、研究代表者）、基盤研究 B（2013-2015 年度、研究分担者）を用いて、バカロレア試験で問われる力が高校教育や大学教育と接続しているかという点と、コンピテンシー教育の特徴について研究してきた。

その過程で、フランスの高校職業科では、職業バカロレア試験に向けて、教養ベース（知識の体系の伝達と評価）ではなく、知識を活用するコンピテンシー・ベースの指導・評価法が取られていることを指摘した。職業科には、学力に課題のある生徒が多く集まっている。ここから、高校普通科でも、困難を抱えた生徒に対しては、バカロレア試験に向けて、従来の教養ベースではなく、コンピテンシー・ベースの指導・評価法を取っているという仮説が浮かんだ。

また、2007 年の中央視学官報告書によると、フランスの中等教育段階において、コンピテンシー教育政策の進展状況には、教科による違いがある。数学などの理系科目と英語ではコンピテンシー教育政策が早くから浸透しつつあるものの、歴史・地理やフランス語などの文系科目では、従来の教養教育が中心であるという。したがって、フランスの高校教師は、バカロレア試験をめざして指導・評価する際、教科により、教養ベースとコンピテンシー・ベースとを柔軟に使い分けているという仮説をたてた。

以上の二つの仮説から、バカロレア試験に向けた指導・評価法は、教科や生徒の特性によって異なる可能性がある（教養ベースか、コンピテンシー・ベースか、など）といえる。もしそうだとすると、日本でも、論述式の大学入試をめざす際、教科や生徒の特性によって、高校での指導・評価のアプローチを変えることが有効であると示唆される。

２．研究の目的

以上の背景をふまえ、本研究では、次の 3 点を明らかにすることを目的とした。

（1）バカロレア試験の筆記試験で問われる能力の特徴

（2）教科と生徒の特性によって、バカロレア試験に向けた高校普通科での指導・評価法にいかなる違いがあるか：授業の教育目標、教材、指導過程、学習形態、評価の基準と方法

（3）論述型の大学入試に向けた日本の高校での指導・評価法の実践的指針

３．研究の方法

（1）文献研究

①バカロレア試験問題で問われる能力の分析

歴史・地理と、英語、数学のバカロレア試験問題（筆記試験）を分析し、バカロレア試験ではどのような能力が問われているのかを検討した。

②コンピテンシー教育の展開過程の解明

コンピテンシー・ベースの指導・評価法が、フランスの中等教育においてどのように受容されてきたかを、学習指導要領などの制度面と実践面の両面から検討した。

（2）フランスでのフィールド調査
①2018 年 2 月に、フランス東部のイレー・ド・シャルドネ高校とマティアス高校という、生徒の困難度が中程度で、同じ街にある二校を訪問した。二校は学校規模も生徒の社会・学業的背景も同様であるが、バカロレア試験の成績は、過去 5 年間一貫して、イレー・ド・シャルドネ高校の方が高い。その要因を探るべく、歴史・地理、英語、数学の 3 教科について、授業観察と教員へのインタビューを行った。

②2018 年 9 月にパリ郊外の困難校（ジャン・ゼイ高校）とパリの中位校（エレーヌ・ブシェ高校）、2019 年 2 月にパリの進学校（ジャンソン・ド・サイ高校）を訪問し、歴史・地理、英語、数学の 3 教科について、授業観察と教員へのインタビューを行った。3 校の選定規準は、出身階層が恵まれた生徒の多さ・少なさという生徒の困難度である。

③2018 年 9 月と 2019 年 2 月に、ルーアン大学のクレマン准教授に、フランスの新しい大学入学制度である Parcoursup の運用についてインタビューした。また、2019 年 2 月に、フランスキャリア・カウンセラー協会のシルヴィ・アミシ会長に、Parcoursup に向けた高校での進路指導についてインタビューした。

（3）日本の高校でのフィールド調査
2017 年 7 月と 9 月に立命館高校、2017 年 12 月に名古屋商業高校、2017 年 11 月に京都市立銅駝美術工芸高校、2018 年 1 月に立命館宇治高校を訪問し、授業観察と教師へのインタビューを行った。これにより、日本の高校における思考力・判断力・表現力の指導・評価の現状と課題（AL の開発に力を入れており、AL における学習成果の評価法の検討は途上である、など）を把握し、フランスの高校でのフィールド調査の枠組みの精緻化に役立てた。

４．研究成果
（1）バカロレア試験の筆記試験で問われる思考力・表現力の特徴
バカロレア試験では、全体的に、資料の分析力と論述・論証力が評価されていることが明らかになった。資料から必要な情報を抽出し、比較・関連づけてまとめ、それを授業で習った知識と結びつけ、一貫した論理構成の文章で書く力、もしくは、既習の知識をもとに一定の型に沿って論じる力が問われている。とくに、批判的思考力が重視されているのが特徴的である。社会における支配の構造に気づく、立場の限界を示す、社会の問題を解決できるか検討する、などの視点で考えることが求められる。このように思考過程や表現の論理性が問えるのは、試験時間が長く、問題数が少ないためである（歴史・地理：4 時間で 2 問、英語：3 時間で 21-23 問、数学：3 時間で 29 問）。
ただし、バカロレア試験およびフランスの大学入学制度の改革により、フランスの大学に入学するために求められる能力の質は今後変わる可能性がある。2018 年度からは入学者を学力も参照して振り分ける高等教育進路選択システム（Parcoursup）が導入され、2020 年度からは、バカロレア試験の 40%を高校の内申点で評価する制度に改革される。インタビューからは、バカロレア試験合格者は大学に全入というこれまでの原則が崩れ、高校の成績による実質的な「選抜」が一部の大学・学部でなされていることと、その選抜の基準が十分に公開されていないので高校は対応に困っていることが明らかになった。
以上のことを、雑誌論文①、③、学会発表②、④、⑤、⑥、⑧、図書②で報告した。

（2）フランスの高校での指導・評価法
バカロレア試験に向けた指導・評価法は、困難校や理系科目・英語の授業はコンピテンシー・ベースであるが、進学校や文系科目の授業は教養ベースと、教科や生徒の特性によって異なるという仮説を当初立てていたが、そのような単純な二分法ではないことが明らかになった。
生徒の困難度が異なる三つの高校において、指導法の全体的な特徴は、学校・教科を問わず共通していた。どの高校・教科の教師も、協同学習などの主体的な学習や、論述の課題といった、日本で AL と呼ばれる指導法を取り入れていた。ただし、その内容については、生徒一人ひとりが抱える困難に応じて調整していた。
フランスの中学校歴史においては、共通基礎の制定（2005・2006）、改訂（2013-2015）と進むにつれて、学習指導要領における教科横断性・知識の活用・実用性の観点が次第に強調され、コンピテンシー・ベースの度合いが強まっていった。授業観察とインタビューから、現在は高校においても、コンピテンシー・ベースの指導法が、生徒の困難度や教科を問わず広まりつつあることが明らかになった。論述式の課題の評価基準を教師が生徒とともに作成したり、それをもとに生徒が自己評価や相互評価をしたりといった、論述の方法論を明示的に教える指導を、多くの教師が取り入れていた。
イレー・ド・シャルドネ高校とマティアス高校での調査の結果、二校の間で指導法に大きな差は見られなかったが、教員間の協働と個別的な学習支援には違いがあった。バカロレア試験

で問われる思考力・表現力を効果的に育成するためには、高校において、論述の課題の日常的な添削や、主体的な学習の促進（答えをすぐに教えず考えさせる、協同学習、自己評価、相互評価、生徒とともに評価基準作成）といった指導法の工夫だけではなく、教員間の協働と、授業外での個別的な学習支援も積極的に行うことが重要であるという可能性が見いだせた。この協働と学習支援が教員への信頼感、学習意欲の向上につながり、結果的にバカロレア試験の成績向上などの学業成功に結びつくと考えられる。

以上のことを、雑誌論文②、④、学会発表①、⑦、⑨、図書①、③で報告した。

（3）日本の高校現場へのフィードバック

2019 年 2 月に名古屋市立富田高校において、また、高校教員も多く参加していた HEAD セミナー（学会発表③）において、フランスの知見をふまえ、日本の高校における思考力・判断力・表現力の指導・評価法について提案した。

それは具体的には、次の 3 点である。一つ目は、思考力などを育むために、AL など方法論の改善に注目が集まっており、それも重要であるが、これまで日本の教育実践が重視してきた教員間の協働（授業研究など）と生徒への個別支援が、思考力などを高める土台になるということである。

二つ目は、AL を導入するのであれば、そこでの生徒の学びを多面的に評価する方法を開発する必要があるということである。評価はこんな力を育んでほしいという生徒へのメッセージになる。したがって、生徒の捉えたい面に応じて、自由記述式問題や実技テスト、選択肢問題など、様々な評価方法を組み合わせる必要がある。

三つ目は、生徒を主体的な学習者として育てるためには、教師が評価するだけではなく、生徒による自己評価や相互評価、評価基準の作成を取り入れることが有効ということである。

今後は、本研究の成果に基づいて日本の高校と授業研究を行い、思考力などを育む指導・評価法の開発にとりくんでいきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 6 件）

①細尾萌子「フランスの高大接続からのヒント―思考力・表現力と内申点の評価―」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科附属高大接続研究センター紀要』査読無、No. 4、2019 年、80-110

②細尾萌子「フランスの中学校における学習指導要領の変容（1998 年・2008 年・2015 年）―コンピテンシー・ベースの影響―」『フランス教育学会紀要』査読無、第 30 号、2018 年、7-16

③細尾萌子・田川千尋・大場淳「フランスの高大接続改革の動向―バカロレア試験への内申点活用と進路選択システムの見直し」『フランス教育学会紀要』査読無、第 30 号、2018 年、77-88

④細尾萌子「フランスの中学校におけるカリキュラム実践の動向」日本教育実践学会編『教育実践学研究』査読無、第 19 巻第 2 号、2018 年、3-6

⑤細尾萌子「世界の学力調査―諸外国の学力ガバナンスと学力調査―フランスにおける学力調査」『シナプス』査読無、Vol. 61, 2018 年, 37-41

⑥Pierre Merle et Moeko Hosoo, 《L’évaluation des écoliers et collégiens, une approche comparative France-Japon》, *Carrefours de l’Éducation*, 査読有, no. 44, 2017, 211-227

〔学会発表〕（計 9 件）

①細尾萌子「コンピテンシー教育をめぐる論点―フランスを鏡として」第 1 回高等教育研究プラットフォーム、2018 年

②細尾萌子「フランスの高大接続からのヒント―思考力・表現力と内申点の評価―」名古屋大学高等教育研究センター招聘セミナー、2018 年

③細尾萌子「バカロレア試験で問われる思考力とその育成」HEAD セミナー＆フランス教育学会研究懇話会、2018 年

④大場淳・細尾萌子「フランスの高大接続改革は民主化を促すか―高等教育進路選択システム(Parcoursup)に焦点をあてて」フランス教育学会第 36 回大会、2018 年

⑤細尾萌子・渡邉雅子・大場淳「フランスの高大接続の特質―論述試験に向けた思考力・表現力の育成」日本教育学会第 77 回大会、2018 年

⑥細尾萌子「フランスの高校改革と大学入試改革―高校の内申点重視の功罪―」、2018 年

⑦細尾萌子「フランスのコレージュの学習指導要領における学びの「深さ」の変容―コンピテンシー・ベースの影響―」フランス教育学会第 35 回大会、2017 年

⑧細尾萌子「フランスのバカロレア試験における能力観と評価観」先導的人社プロジェクト政策・制度グループ研究会、2017 年

⑨細尾萌子「フランスの中学校におけるカリキュラム実践の動向」日本教育実践学会第 20 回研究大会、2017 年

〔図書〕（計 5 件）

①細尾萌子、原田信之編著『カリキュラム・マネジメントと授業の質保証　各国の事例の比較から』北大路書房、2018 年、244（123-148）

②細尾萌子、田中耕治編『よくわかる教育課程　第 2 版』ミネルヴァ書房、2018 年、230（110-111,

112-113，114-115，216-217）
③細尾萌子「コンピテンシーに基づく教育改革―中等教育の伝統の打破？」フランス教育学会編『現代フランスの教育改革』明石書店、2018 年、362（150-170）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://research-db.ritsumei.ac.jp/Profiles/134/0013303/profile.html

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。